

2009年6月20日

平城宮第一次大極殿院内庭広場（平城第454次調査）現地説明会資料

独立行政法人国立文化財機構
奈良文化財研究所 都城発掘調査部

1. 調査の経緯

第一次大極殿院の発掘調査は、昭和34年度（1959）の第2次調査より開始し、区画の東半分については、すでに奈文研学報『平城宮発掘調査報告X1』として報告している。その後、区画の西側の回廊部分を中心に調査を継続し、昨年度で回廊部分の調査を終了した。本年度は、築地回廊内庭部の状況確認を目的として、東半で未発掘であった区画内部の南東隅部分の調査を計画した。

調査区は、北を第27次調査区（昭和40年度・1965）、東を第41次調査区（昭和47年度・1972）、西を第77次調査区（昭和48年度・1973）、南を第431次調査区（平成20年度・2008）に囲まれており、調査面積は約1558㎡（南北54m、東西29.5m）である。調査は4月13日より開始し、現在継続中である。

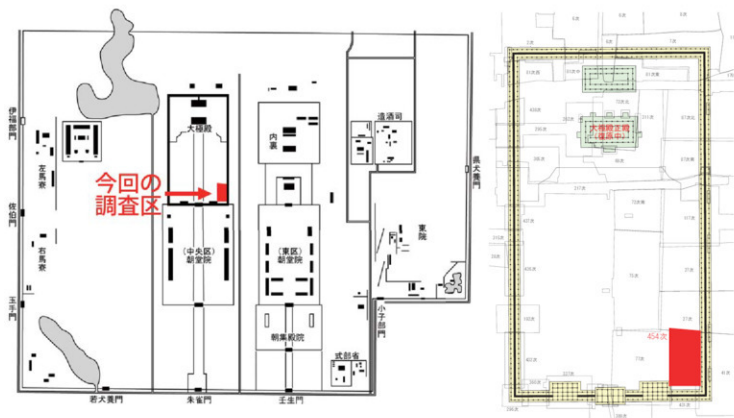


図1 奈良時代前半の平城宮と今回の調査区
（左：井上和人「日本古代都城制の研究」吉川弘文館をもとに作成）

2. 第一次大極殿院地区の変遷

これまでの成果より、第一次大極殿院地区の遺構はⅠ～Ⅲ期の大きき3時期に区分される。Ⅰ期はさらに4時期に分けられる。以下、各時期について説明する。

- (1) Ⅰ期：平城宮造営当初より、恭仁宮から遷都するまで。奈良時代前半。
- Ⅰ-1期…平城宮造営当初。区画の周囲を複廊の築地回廊で囲み、区画内は、北約3分の1で段差を設け、壇上に大極殿と後殿を造る。
 - Ⅰ-2期…南面回廊を改修し、東西に楼閣を増築する。
 - Ⅰ-3期…恭仁京遷都時。大極殿と東面・西面回廊を解体し、恭仁京に移築する。東西両面は掘立柱塼が新たに造られる。
 - Ⅰ-4期…遷都後。掘立柱塼を解体し、東面・西面回廊が再建される。
- (2) Ⅱ期：奈良時代後半。区画の南北幅を狭め内裏と同規模の区画とし、周囲は複廊の築地回廊で区画する。東西の回廊はⅠ期の基壇を踏襲する。区画の内部は、中央に段差を設け、壇上には多数の掘立柱建物を建てる。称徳天皇の西宮に比定。
- (3) Ⅲ期：平安時代初頭。Ⅱ期の区画を踏襲し、回廊は基壇幅を狭め、築地塼のみとする。区画内部は、新たに建物を造営する。平城上皇の宮殿に比定される。

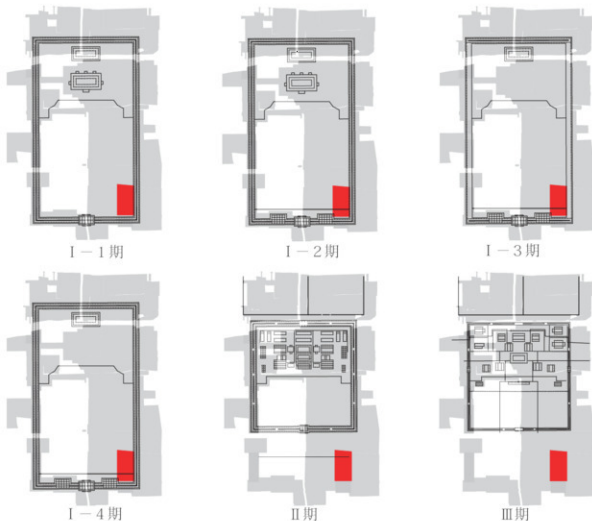


図2 第一次大極殿院地区変遷図

3. 主な検出遺構

- ・下層礎敷…平城宮造営当初に第一次大極殿院内庭部に敷いた礎。造営時の整地土の上に、径3～10cmの礎を敷き、舗装する。北から南になだらかに傾斜する。
- ・中層礎敷…I～2期の東西楼閣増築にともない楼閣周辺に敷かれた礎。下層礎敷の上に土を盛り、その上に径5～15cmの礎を敷く。東西溝より南では徐々に土を厚く積み、地面の傾斜を変え雨水が後述の東西溝に流れ込むようにしている。
- ・上層礎敷…中層礎敷の上に砂を敷き、その上に径1～3cmの小礎を敷く。この礎敷の上面で、回廊に使用されていた瓦が出土しており、礎敷の施工が南面回廊解体以前であることが分かる。
- ・東西溝……上層礎敷面で検出した幅2mの東西溝。2時期ある。深さは約35cmで、埋土から多量の瓦が出土した。周辺の遺構面よりも低い位置に作られているので、北側の内庭広場と南側の南面回廊双方からの排水を担っていたと考えられる。この溝は東西の調査区(第41・77次)でも検出しており、東に流れ、東面回廊内側の西雨落溝に合流し、暗渠で区画外へ排水していたことが判明している。
- ・土坑……調査区中央で検出した東西約22m、南北約17mの長方形の落込み状の遺構。深さは約20cm。埋土に多量の礎と砂が混じる。上層礎敷面を掘り込んでおり、水がたまったような痕跡はない。西側の対称位置でも同様の遺構が認められており、東西対称に計画された可能性が高いが、遺構の性格は不明。
- ・東西塀……調査区の北側で検出した掘立柱塀。径60cmの柱穴5基を確認した。柱間寸法は4.5-5.4mと不揃い。抜取穴には、瓦や磚が詰まっている。第77次調査でもその延長部分を確認しており、Ⅱ期南面回廊より約49m南に位置する。柱穴が小振りて柱間寸法も広いため、仮設の塀であろう。上層礎敷面から検出。
- ・東面築地回廊足場穴…第41次調査区との重複部分で再検出した。径40cmの柱穴が南北に並ぶ。いくつかは重複しており、2時期分とみられる。それぞれ東面築地回廊の建設と解体にともなうものであろう。

4. 出土遺物

調査区中央付近の包含層より^{平城宮造営期}乾元重宝(唐銭・758年発行)が1点出土した。そのほか、軒瓦、磚、隅木蓋瓦、奈良時代の須恵器・土師器、古墳時代の埴輪片などが出土した。

現地説明会の案内を電子メールに切り替えております。

ご希望の方は、お名前・ご住所・メールアドレスを下記アドレスまでお送りください。

eメールアドレス heijo@nabunken.go.jp

4. まとめ

今回の調査の成果は以下のとおりである。

- (1) 第一次大極殿広場の礎敷の変遷を明らかにし、特に中層礎敷の範囲を面的に確認した。また、造営当初は北から南面回廊まで傾斜していた地表面が、東西楼閣の増築にともない回廊北側の東西溝へ排水するように変更されていたことが改めて確認された。恭仁京より還都した後は、区画内部の舗装を径の小さな礎敷に敷きなおしている。
- (2) 東西対称に設けられたとみられる、長方形の土坑を確認した。

平城宮第一次大極殿院関係年表

平城宮第一次大極殿院関係年表		
710(和銅 3)	3/10	【第一次大極殿院】 平城京に遷都。大極殿は未完成(南面回廊整地土出土木簡)この間に藤原宮大極殿を平城宮に移築
715(養老 1)	1/1	大極殿において元日朝賀
	9/2	大極殿において元正天皇が即位
717(養老 1)	4/25	西暦において大隅・薩摩國の集人の風俗・歌舞を見る
719(養老 3)	1/2	大極殿において元日朝賀
724(神亀 1)	1/2	大極殿において元日朝賀
	2/4	大極殿において聖武天皇が即位
727(神亀 4)	1/3	大極殿において元日朝賀
728(神亀 5)	1/3	大極殿において元日朝賀
729(天平 1)	3/4	大極殿において即位
	6/24	大極殿内門において集人の風俗・歌舞を見る
	8/5	大極殿において天平改元の詔、大赦、即位
730(天平 2)	1/2	大極殿において元日朝賀
732(天平 4)	1/1	大極殿において元日朝賀。天皇が初めて夏屋を普る
735(天平 7)	8/8	大極殿において大隅・薩摩の集人の朝賀を受ける
736(天平 8)	1/17	南楼において薛臣に踏歌節の宴會を催す。この頃までに南面回廊に東西の楼閣を増設(SB3715出土木簡)
737(天平 9)	10/26	大極殿において金光明嚴勝王経講読
740(天平 12)	1/1	大極殿において元日朝賀
	12/15	大極殿内門で大射を見る
753(天平勝宝6)	1/17	恭仁京に遷都。その後大極殿と歩廊を恭仁宮に移築この頃大極殿院南面の楼閣を解体か(東西棟出土木簡)
		Ⅰ期

765(天平神護1)	1/1	【西宮】 西宮前殿で元日朝賀
767(神護景雲1)	8/8	西宮後殿で宴會
768(神護景雲2)	11/22	新嘗祭の豊樂を西宮前殿に設ける
769(神護景雲3)	1/3	西宮前殿で道鏡が拜賀
770(宝龜 1)	8/4	西宮後殿で称徳天皇死去
		Ⅱ期

784(延暦 3)	11/11	【平城上皇の西宮】 長岡京に遷都
794(延暦13)	10/22	平安京に遷都
809(大同 4)	11/5	平城田原などで平城上皇の宮地を占定(類聚国史)
	11/12	藤原仲成らを派遣して平城宮を造営(日本紀略)
	12/4	平城上皇平城に行幸。宮殿未完成のため、右大臣大中国清麻呂の家を御居所とする(日本紀略)
810(弘仁 1)	9	平城上皇平城遷都を図るが失敗し制變。以後も平城宮に住む
824(天長 1)	7/7	平城上皇死去(日本紀略)
825(天長 2)	11/23	平城上皇の親王らに平城西宮の管理・居住を認める(僧徒宣抄)
		Ⅲ期

(神代したものを以外は大國史による)

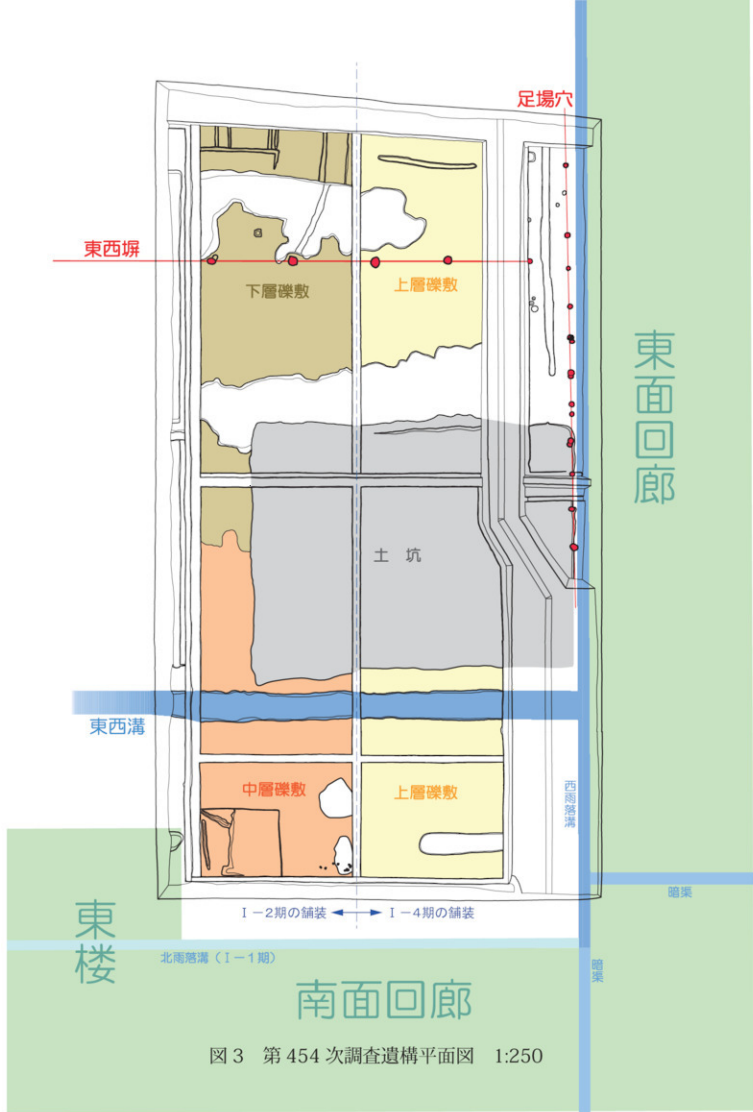


图3 第454次調査遺構平面図 1:250

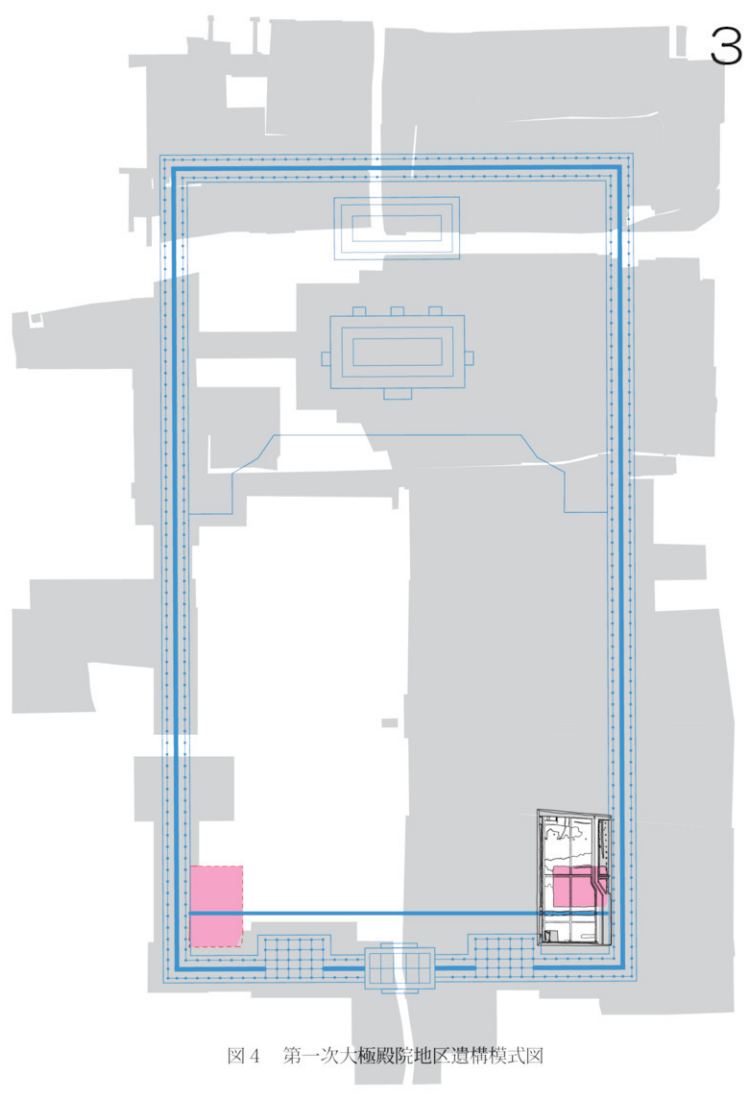


图4 第一次大極殿院地区遺構模式図